

年月のあしおと

映画文学人生論

広津和郎 (1891--1968)

『年月のあしおと』 (1961-63) 「群像」

『続 年月のあしおと』 (1964-67) 「群像」

『同時代の作家たち』 1926 「文藝春秋新社」

参考：広津柳浪『今戸心中』 (1896) 「文芸倶楽部」

私は卒業と同時に、一家の生活を自分で背負おうと考えた

父親に反抗し、その反抗ぶりを小説の種にする作家は珍しくないが、広津和郎は逆に文壇一の親孝行という評判を立てられた。

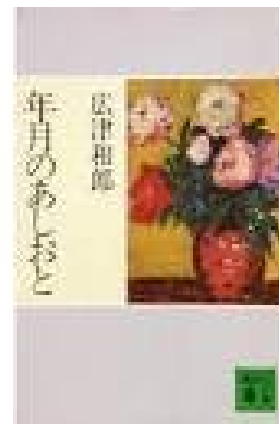
回想記『年月のあしおと』によれば「数え年十歳頃かと思うが、母亡き後すっかり「お父さん子」になっていた私は無暗（むやみ）に父を慕ったものである」。

父の広津柳浪は硯友社で一時は尾崎紅葉にならぶ作家として目される存在だったが、紅葉亡き後は硯友社が衰頽し、自然主義がもて囃される時代になって貧窮した。小説を書く以外に生活の方法がなかった父が、筆を執らなくなったのだから一家の生活が逼迫するのは当然だ。

しかし、父は家族の者に向って弁解がましいこととは一言も云わなかった。生活が逼迫して来たということについて、父が弁解もせず、泣言らしいことを一言も云わなかったことは、たしかに私に好影響を与えたと云えると思うと和郎はいう。

久留米藩士の家に生まれた父には「武士は食わねど高楊枝」という諺のような痩せ我慢があり、それが息子教育には効果的だったらしい。

母の死後、父は再婚した。義母は嫁いで来る時は、一生着れるだけのものを持って来たというほどの衣装持ちだったが、長い間の居食い生活のためそのほとんどがなくなつた。



年月のあしおと

映画文学人生論

おまけに、義母が父のもとに嫁いできたとき、義理の子供たちは兄が数え年十四、弟の和郎が十二の生意気盛り。父はどつちかというと、母よりも子供たちに贖済する態度をとった。これでは母はたまったものではない。

「私は十七、八の頃から父によく云ったものであった」と広津和郎は回想している。

「父さんが誰よりも母さんを庇うようになさるなければ、家の中がうまく行かないと思います。兄さんや僕はこれから育って行く身ですから、ほつといて下さっても育って行きます。しかし母さんは父さんが庇って上げる以外に、仕合わせになりようがない方です」。

兄は大学を卒業すると、家を出ていったが、弟の和郎は。生活力のない父と義母の一家を自分で背負おうと考えた。しかし、就職する気にはなれず、金になる長編小説の翻訳はないかと物色し、モーパッサンの『女の一生』に目をつけた。

「翻訳するからには金になるものを」という読みがあたり、二十一歳の時から七十歳を越えるまで半世紀に亘って印税がはいってきたという。

彼は正宗白鳥の否定的、懐疑的な色調の濃厚な『妖怪画』を読んで胸にぐっと来るものを感じ、自分でも小説を書くようになったが、そんな小説が『女の一生』ほと売れたとは思えない。

白魚に口紅さしつ小傾城

広津柳浪